解脱の宝飾　第16章　静慮の波羅蜜　P２４５・１６行目～２４７・１２行目　　2020/ 2/6　ozeki

～ここまでのおさらい～

般若の波羅蜜（智恵の完成）

1　過失・功徳の二種類を思惟すること
2　［自］体
3　区別
4　区別ここの自相（定義）
5　知るべきこと
　　1）事物［・有］だと執らえることを否定する
　　2）非事物［・無］だと執らえることを否定する
　　3）無いと執らえることの過失
　　4）執らえることと両分の過失
　　5）解脱することになる道
　　6）解脱の自性［である］涅槃　　＊本日は赤文字の部分を学びます。
6　数習すること
　　数習の必要性
　　数習そのもの
　　1）前行
　　2）等至（三昧）
　　3）後得
　　4）数習したことの証因です
7　果

解脱の自性、涅槃

涅槃　（引用：仏教用語の基礎知識　p２８）

涅槃とは（nirvana）の音訳であって寂とか寂滅とかも訳される。仏教以前にはこれを不死（amrta, Amata 甘露）ともいった。生死輪廻を越えた理想の状態を指す。涅槃とは貪欲（むさぼり）・瞋恚（いかり）・愚癡（おろかさ）などの一切の煩悩が滅尽したことであって、nir-va-ana（吹き消すこと）すなわち一切の煩悩を吹き消すこと、または一切の煩悩の火が吹き消されている状態をいう。すなわち最高の悟りの境地である

第六の義：解脱の自性［である］涅槃を説明するには、

では、輪廻の一切法は、事物または非事物のどれとしても成立していないのであるなら、「涅槃」といわれるそれは、［有・］事物であるのか、［無・］非事物であるのか、というと、

認得［・所縁］を有する或る者［・実有論者］たちは、涅槃は事物として有ると思惟します。［しかし、］そうではないのです。『宝鬘』に、「涅槃は非事物でもないなら、なぜ事物でしょうか。」と説かれています。

もし事物であるなら、涅槃は有為になるのです。有為であるなら、最後には滅することになるのです。そのように『根本般若［中論］』［の第２５章「涅槃の観察」］に、「もし涅槃が事物なら、涅槃は有為になる。」などと説かれています。

［また、涅槃は無為の］非事物でもないのです。『同論』に「それに非事物が有るわけでない。」と説かれています。

では、どれほどをいうのかというと、

事物だと執らえるのと、非事物だと執らえるのとの知すべてが尽きていて、知を越えていて、言説を離れているーそれを、「涅槃」というのです。そのようにまた『宝鬘』に、「事物・非事物と執らえることが尽きているのを、涅槃という。」と説かれています。『入菩薩行論』にもまた、「事物と非事物が知の前に住しない。そのとき他の種類も無いので、認得が無くて寂静です。」と説かれています。

『聖梵天所問経』にもまた「般涅槃」というのは、相すべてが寂静であり、動きすべてを離れている。」と説かれています。『妙法蓮華経』にもまた、「カーシャパよ、一切法は平等であることを了解することが涅槃です。」と説かれています。

認得　認めること、認知すること、対象としてとらえるもの

有為　因と縁との和合によって作り出された諸現象をいう　因縁によって作られた生滅変化するもの

寂静　①静かなこと、心の平穏　②孤独なこと

③涅槃の異名　ニルヴァーナにおいては、苦なく欲なく一切の煩悩がなく心身が寂静であること

悟りの世界

般涅槃　（引用：仏教用語の基礎知識　水野弘元　ｐ２８）

部派仏教時代になると、涅槃には有余・無余の二種があるとされ、有余涅槃とは業報に関係した肉体という残余が存在している間の心の涅槃であり、無余涅槃とは、肉体の残余もなくなった身心すべての涅槃で、完全涅槃とされる。この考えは外教の影響を受けたもので、仏教本来のものということはできない。しかし釈尊の肉体の死滅を無余涅槃とし、これを般涅槃（円寂、完全涅槃）といった。それが後には涅槃そのものを仏などの聖者の死滅と解するようになり、涅槃経、涅槃像、涅槃会などの涅槃は、仏の滅、死滅を意味する。

★輪廻と涅槃について

【引用】　翻訳者ノート 12. 解脱の宝飾　p.81-03

（前略）

「輪廻と涅槃の二つの自性」（こるわ・たん・にゃンで・に・き・らンしん）というのは、チベット語の文法から見て、あきらかに「輪廻と涅槃の二つ」の「自性」であって、「輪廻と涅槃」の「二つの自性」ではありません。

解脱の宝飾Ｐ８１　輪廻の涅槃の二つの自性

一般的に一切法は輪廻と涅槃の二つに摂まっています。そのうち「輪廻」というのは自性［についての］空性です。形相は錯乱です。自性は苦[の現象]として浮かんでいるのです。「涅槃」というのは自性[による成立についての]空性です。形相は錯乱すべてが尽きて消失したのです。自性は苦すべてから解脱したのです。

「輪廻と涅槃の二つの自性」（こるわ・たん・にゃンで・に・き・らンしん）というのは、チベット語の文法から見て、あきらかに「輪廻と涅槃の二つ」の「自性」であって、「輪廻と涅槃」の「二つの自性」ではありません。

一般的に一切法は輪廻と涅槃の二つに摂まっています。そのうち、「輪廻」というのは自性空性です。形相は錯乱です。自相は苦として浮かんでいるのです。「涅槃」というのは自性空性です。形相は錯誤すべてが尽きて消失したのです。自相は苦すべてから解脱したのです。

和訳本では〔〕内に翻訳者の補足が書かれていますが、かえってわかりにくいことが多いので、原則的には省略して考えることにします。これを表にまとめてみると、次のようになります。

	自性	形相	自相
輪廻	空性	錯乱	苦
涅槃	空性	無錯乱	無苦

自性に関してみれば、輪廻も涅槃も共通で、空性です。「自性」（らンしん）というのは、あるものAを特徴づけるBのことをいいます。たとえば、「花には花性がある」とか「犬には犬性がある」というように、さまざまの花をどれも花と認識でき、さまざまの犬をどれも犬と認識できるのは、花性とか犬性とかいうような自性があるからだと、ヒンズー教徒は考えていました。しかるに、仏教徒は、そのような自性は人間が勝手に言葉で仮説（けせつ）したものであって、実際には存在しないと考えました。「言葉で仮説しただけで、実際には存在しない」ことを空性（とんぱに）といいます。輪廻の自性とか涅槃の自性とかは、言葉で仮設しているだけで、実際には存在しません。つまり、輪廻と涅槃の区別は、人間の心が勝手に作りだした区別です。

それなのに輪廻が輪廻なのは、形相に錯乱があるからだと、ガムポパ大師は言われます。「形相」（なむぱ）は、「かたち」ということです。かたちというのは、目で見える形だけでなくて、感覚器官で感受される、色・声・香・味・触のすべてでしょう。それらが錯乱しているというのですが、「錯乱」（トゥルパ）というのは、Illuminator Dictionary には「環境を知覚するときに心が間違いを犯すこと」（The mind has made a mistake in its perception of a situation.）と定義されています。なぜ心が間違いを犯すかというと、煩悩（誤った思い込み）があるからです。煩悩がなくなると、錯乱がなくなります。どうすればなくなるかは、本書に説かれていることを実行すればなくなるはずです。

形相に錯乱があって涅槃の状態にいると、「自相は苦」だと書かれています。「自相」（つぇんに）というのは、サンスクリットの lak?ana の翻訳語で、漢訳では「相」と訳されてきましたが、英訳は普通 characteristic（性質）で、この方がわかりやすいです。つまり、輪廻の性質は苦であり、涅槃の性質は苦の解脱だということです

★ 般涅槃について　一切法は平等であることを了解することが涅槃です。

【引用】チベット仏教・菩薩行を生きる　シャンティーヴァ「入菩提行論」p１９６・２１３

１４５「事物があれば、原因に何の必要があろうか。しかし、それがない［場合に］、何の原因が必要であろうか」

１４６「百万の原因によっても無事物に変化はない。［もし変化するならば、］　そのような状態にあるものが、どうして事物となろうか　他のいかなるものが事物であろうか」

１４７「存在しないときに事物が「あることは不可能ならば、いつから事物としてあるのだろう。事物が現われなければ、無事物（＝非存在）から離れることもない

１４８「もし事物と離れないなら、事物があるというときは不可能だ。［さらに、］事物も非存在とならない。［それを認めれば］二つの性質になってしまう

１４９「このように消滅もなければ、事物もない。それゆえ衆生これらすべては、常に不生であり不滅である」

▲実体とその生滅の否定と、輪廻と涅槃の平等

理論の証明によって、事物がそれ自体の力によって存在することを否定し、（第９章１４５～１４８）

事物に実体性があることを否定し（第９章・１４９）、さらに輪廻と涅槃は平等であることを示します。（第九章・１４９）

このように、事物は生滅し、実体性がないと説くことによって、時間に関連する「有」の辺と「無」の二つを否定するとともに、対象に関連する去来などすべてについて実体を否定します。まず何よりも、生じるということは、実体を否定しています。実体として生滅することがなくても、ことばとしてそれらはあります。同様に、生滅などの諸法はことばでしかなく、実体のない空なるものであるという意味で、それらは、幻や夢などのようなものです。

このように、業と煩悩による輪廻世界における輪廻と、業と煩悩から解脱する涅槃、これら両者も実体性がなく、その意味では平等なのです。

そのようにその涅槃は、知の動きが寂静であることのみ以外の生・滅、または断除・逮得などどの法としても成立していることが無いのです。そのように『根本般若［中論］』に「断除が無いし、逮得がない。断がないし、常がない。滅が無いし、生が無いそれが、涅槃です。」と説かれています。

そのように生・滅、または断除・逮得などどの法としても無いから、その涅槃には自により造られたこと、作為されたこと、改変されたことが無いのです。そのようにまた『虚空宝経』に「これには除去されるべきものは何も無い。確立させられるべきものは少しもない。真実について真実とみる。真実が見えたら、解脱する。」と説かれています。

そのように、智恵または自己の心を知るべきという言葉それらもまた、分別により断じられた側からです。智恵または心の義は、知られるべきこと、または述べられるべきことを越えているのです。そのようにまた『善勇猛所問経』に、「智恵の完成（般若波羅蜜）は、どんな法によっても述べられるべきものではない。言葉すべてを越えている。」と説かれています。ラーフラによる「仏母への讃」にもまた「語ること、思惟すること、述べることが無い般若波羅蜜―生じてないし、滅していない、虚空の自性。自内証智の行境―三世の勝者の母に対して、礼拝します。」といって

［以上］、智恵は知られるべきであることを、説明し終わりました。

断除　断ち切って除くこと

逮得　得ること　完全に得ること

断　　悪を断ずること　煩悩を断つこと

常　　変化しないこと　常住

滅　　消え失せること　滅びること

生　　生ずること

ラーフラ　羅睺羅（らごら、梵/巴:Rahula ラーフラ）は、仏教の開祖たる釈迦の実子であり、またその弟子の一人（引用：Wikipedia）

自内証智　自らの内で感得されるもの

【引用】ドルズイン・リンポチェ・六波羅蜜のご法話より

智慧はチベット語で「シェーラプ」、「最高な智」と言います。「ラプ」というのが「最高、一番」という意味です。 「無我のありさま」と「一切法は、無自性であり空である」 ことを理解する智慧のことです。 布施を、空性を理解して行えば、輪廻から逃れる解脱の因になります。しかし、空性を 理解せずに布施を行っても、輪廻から逃れることは出来ません。なぜなら「我執」を持ったまま行うからです。 布施以外の戒律にしても、忍耐にしても、それを行えば勿論善を積み、功徳はあります が、それだけでは仏にはなれません。「無我を理解する見解」がないと、仏になることは出来ないのです。 そのため「私」という思いを断じなければなりませんが、私たちは布施などをする際、 まず、「布施をする私」がある。そして、「布施をするもの」がある。そして、「布施を する対象」があると、「それら三つが有る」と考えて布施を行っています。それ以外の 忍耐や戒律でも、「それを行う人がいる」と考えて行います。自他を分けた上で善業を積んでも、仏になるための資糧を積みますが、「無我」が分からなければ、仏になることは出来ません。 資糧を積むにしても、罪業を清めるにしても、「私」を認めている限りは、仏の境地は 得られません。そのため、「智慧」が非常に重要です。

(中略)

「空」を理解する必要がありますが、「本当にそうだろうか」と疑うのではなく、心か ら「その通りだ」「本当だ」と決定することが必要です。 空性を本当に信じるためには、資糧を積んで罪を浄めることが必要です。それによって、 「空性という智慧」を得られます。罪を浄めることによって最後に「我というものが無い」と解ります。 「父母やすべての生き物たちが苦しんでいる。彼らが苦しみから離れられればいいのに。幸せになればいいのに」という慈悲の想いをもって、菩提心を起こします。自分と他の 生き物、自他を平等に考え、慈悲の想いを強くすることによって、智慧も強く大きくな ります。 「他」、「他のもの」は、現れているだけで実際は「空」です。それは、現れているだけ で本当は真実としては成立していません。本当は「他」がないのに、なぜそう思うのか というと、心がそう思い込んでいるからです。分析すると、心も本当はありません。「他 も真実として無い、自分も真実として無い」とわかります。

「空」をどうやってわかるのでしょう。本当に空なのでしょうか。空はあるのでしょう か。 「無我」と言っても、 「私」はあると思っています。 本当に空性を理解しているのは仏です。仏は、私たちと同じように人間に生まれ、資糧 を積み、罪を浄めて仏になった方です。仏になるということは、空性を理解して、「無 我」を理解されたということです。 輪廻している私たちは、空性がわからず「我が有る」と思っています。仏は我々に「無 我」をわからせるために、法を示されました。「空性」を、仏は理解しています。それを認めることは簡単には出来ないことですし、 実践しなければわかりません。最初から「対象としての父や母は、本当は存在しない」 と言われても、よくわかりません。そこに疑いや疑問が出ます。しかし、資糧を積んで 罪を浄めることで、徐々に疑いが晴れていきます。 疑うことは仕方ありません。例えば、科学者に、「コップは空を飛ぶ」と言われても、 私たちは、 「何を言っているのだろう」としか思いません。そこで、 「コップも飛行機と 同じようにすれば飛べます」と仕組みを説明されたとします。飛行機を私たちは知って いますし、仕組みを説明されれば納得します。 同様に、 「無我」と聞いても、最初は全く理解できず、 「おかしいのではないか」と思う かもしれませんが、理解することは可能です。「我」は、真実としては成立しません。 「それは有る」と思っているだけです。仏は、「無いものを有ると思っている」ことを 理解しています。 では、「無我ならば、私は無い」と考えるのも間違いです。「私が有る」と考えるのも、 「私が無い」と考えるのも間違いです。空性とは、有無を離れたものです。「有でもなく無でもない」のが空性です。ここを間違うと、「私が無いので、来生も前生も無い」 と誤ってしまいます。 「無我」と言いう時の「無い」は、「真実として成立していない」ことを意味します。 これがわかることが智慧です。「無い」と考えることもまた無明です。 智慧とは、有無の辺、「有る」「無い」という辺から離れ、「無いでもなく、有るでもい」とわかることです。

★三世の勝者の母　について

三世の勝者の母＝仏陀　でしょうか。

【引用】　解脱の宝飾Ｐ１３６　　第９章　菩提心を摂受する
誓願の発心　－　本行

（前略）
「解脱していない者たち」というのは、天と人の趣［の衆生］たちです。鉄の網のような煩悩の繋縛から解脱していないからです。「解脱させる」というのは、彼らを至善の道に立たせて煩悩の繋縛から解放する、解脱の位を得させるのです。
「安息していない者たち」というのは、声門と独覚たちです。大乗において安息していないからです。「安息させる」というのは、彼らが最上の正覚へ発心して、大乗の見・行に安息する、［すなわち］十地の位を得ることです。
「般涅槃していない者たち」というのは、諸菩薩です。無住涅槃を得ていないからです。「般涅槃する」というのは、彼らを地・道に次第に立たせてから、般涅槃する、［すなわち］
仏陀の位を得るようにするのです。

至善　　最高善　この上ない幸福
声聞　　縁覚・菩薩と共に三乗のひとつ。釈尊の説法の声を聞いて悟る弟子
独覚　　三乗のひとつ。仏の教えによらないで自力で悟りを開き、静かに孤独を楽しんで、利他のために説法をしない聖者。縁覚。
見・行　　本性を観ずること・行い
正覚　　悟りを開いた人
十地の位　菩薩が修行すべき五十二の段階の４１位～５０位
無住涅槃　生死の迷いの世界にも、また、涅槃の境地にも、それらいずれにも留まらない涅槃の意。四涅槃のひとつ

★　出来ることは何でしょう

【引用】　五重の道のマハームードラの前行　　ｐ１８
有の世界に快楽を見出そうとする執着への対治として、輪廻の苦痛を思惟せよ。

輪廻の世界に生まれれば　安楽のときはありえない
有の世の楽を見るをやめ　涅槃の道に入るべし

【引用】上司を遠くから呼ぶ
有暇と具足の人身　得たれども　　無駄に費やし　いつでも散乱し
懈怠に流され涅槃に至れずに　　宝の地より空手でかえりゆく
上司よ慈悲もて今こそ見そなわせ　人身の意味成すよう加持しませ

智恵は数習されるべきこと

数習　to be Practiced　練習を積む

数習の必要性　（訳註６６）

今や、その心または智恵は［繰り返し］数習されるべきことを説明します。
では、一切法が空であるなら、知識はそれについて数習べきことはいったい必要なのか、というなら、
［教習することは］必要です。例えば、銀鉱石は銀の自性ですが、溶解、精錬をしていない間は銀が現れないし、水銀が欲しいなら、その銀鉱石を溶解、精錬することが必要です。同じく、一切法は本来、自性空であり、戯論すべてを離れたものですが、諸々の有情においては様々な事物として現れるし様々な苦を領納するから、認識することと教習することが必要です

【訳註６６】

「青冊氏の注釈」には、因果は相応するので、因のとき無住の智恵と悲を修習したことにより、果のとき輪廻と涅槃に住しない仏の三身を得る。しかし、輪廻に住しない因である空性だけを習修するなら、果は寂静の辺に転落する。

戯論　分別が言語に現れること

教習そのもの

よって、上のように知ってから、それを［繰り返し］教習することには四つ、［すなわち］
1）前行と、
2）等至（三昧）と、
3）後得と、
4）教習したことの証因です。

前行　preliminary 予備行為　準備
等至　心身の平等で安らかな状態
後得　悟ったあとに得られた、の意

＜引用文献・参照文献・資料＞

○ドルズイン・リンポチェ　六波羅蜜ご法話・日本ガルチェン協会 HP
○翻訳者ノート・日本ガルチェン協会 HP
○五重のマハームードラの前行テキスト・上司を遠くから呼ぶ
○チベット仏教・菩薩行を生きる　シャンティーヴァ「入菩提行論」
○佛教語大辞典　石田瑞麿著
○仏教用語の基礎知識　水野弘元
○新英和中辞典
○Wikipedia